

【論文】

社会科学のGTA

GTA for Social Sciences

竹下 浩[†]

1 問題と目的

1.1 質的研究の宿題

M.ハーマズリーによれば、社会科学で急速に普及した質的研究法は、当初の約束を果たしていない。質的研究の始まりは、量的研究に対する数々の批判だった。社会的構成概念を操作化して変数間関係进行分析する手法は社会的生活の特徴を無視しており、歪みや誤りが生じる。社会的・人間的行動の研究は自然科学への盲従でなく、社会的世界を理解できる固有の研究法が不可欠だ。人間の行動は固定的パターンに還元出来ず、複雑で流動的だ。人間の行動は文化で形成されるだけでなく、文化自体をも産み出している。質的方法の焦点は構造でなく過程、全体でなく局地である。

しかしその後、質的研究者には傲りが生じた。彼らは理論を科学的に開発するという約束(科学的探究)を忘れてしまった。エスノグラフィーは記述ではないのか。操作化を否定するなら、概念はどう明確化され、データで立証されるのか。H.ブルーマーの指摘(社会的事象は主観的・客観的要素の両方を考慮しなければ理解不能だが、科学的に主観的要素を補足する方法は未解明だ)は、社会科学者の宿題なのである(Hammersley, 1989=2022)。

特に組織や経営管理を対象に含む研究では、「理論」要件が厳格だ。理論は「記述」(「これは何か」の質問に答える)とは異なり、「いつ・なぜ・どう」の質問に答えなければならない(Bacharach, 1989)。

B・G.グレイザーとA・L.ストラウスが創設したグラウンデッド・セオリー・アプローチ(GTA)の目的は、社会科学者がデータから「いつ・なぜ・どう」に答え得る理論を発見することだった(Glaser & Strauss, 1967=1996)。しかしその後、主に看護領域において後続GTAが理論的要件を緩和したため、本来は可能であった社会科学への貢献は忘れられた。

J.コービン¹は、ストラウス死後、「理論構築は望まないが質的データを分析したい研究者」や、「実践や教育で質的分析が必要な読者」にも使えるように、GTAの理論的要件を緩和した。理論は、「関係を表す言明で関連付けられた複数の概念」でよい(Strauss & Corbin, 1998: x, 15=2004: 3, 23)。K.シャーマズも、「皆が理論構築に向かう訳ではない」ので、「随筆等を執筆する専門家にとっても有用」にするための、「理論構築ではなく、訴求力のあるデータの統合」としてのGTAを示した。複数の現実が前提で、研

[†]立教大学社会学部兼任講師(筑波技術大学保健科学部教授) takeshita@k.tsukuba-tech.ac.jp

究者がカテゴリーを構成し、分析中は主観性を認識すればよい (Charmaz, 2014: xviii, 236=2020: xvi, 258)。リハ専門職であれば、たとえば患者の障害受容の心理的過程を知りたいだろう。分析対象は認知(主観)的要素のみとなり、行為(客観)的要素は質問も分析もされなくなる。

その結果、J.ホルトン (博士課程でグレイザーの指導を受けた) が指摘したように、GTAと称する「GT-ing」(理論未満の、テーマ別に整理された記述的報告) が今や広範に存在している (Holton, 2018: 233-234)。社会科学の研究者がGTAを応用するためには、理論的背景の理解とそれに基づく分析が、不可欠かつ急務である。

そこで本稿は、社会科学研究者によるGTA応用を可能にするため、以下を明確にする：

1. どうすれば、社会的現象の「理論」を科学的に発見できるか？
2. 一般的に普及しているGTAと、どう違うか？

そのために、GTA創始者が示した「やり方」を、「なぜそうするのか」説明すべく、創始者の残した手がかりを理論や科学哲学、認識・存在論レベルで検討する。

2 GTAの理論的根拠

2.1 プラグマティズムの継承

ストラウスによれば、GTAは技法ではなく分析のスタイル(技法と思想のセット)だ。思想的源流の1つはプラグマティズム (特にJ.デューイ、そしてG・H.ミードとC・S.パース) で、行為と問題状況および解決法を重視する。もう1つはシカゴ社会学で、観察・面接法を用いて職場の社会科学を探究する。共通点は、社会的営みの本質である変化の方向性(状況移行法則)の理論化と、社会的相互行為と社会的過程の解明である。GTAの理解に不可欠なのは、デューイの『論理：探求の理論』である (Strauss, 1987: 5-6)。

この思想に相当する部分を、本稿では社会的相互行為・過程の理論 (「SI-PT」) パラダイムと呼ぶ。パラダイムとは、社会科学の研究を支える基本的原理(世界を理解する信念)である (Langdrige, 2007)。

2.2 SI-PTパラダイム

このパラダイム (図1) は、「コーディング・パラダイム」 (Strauss, 1987) および「条件・帰結の同心円」 (Strauss & Corbin, 1990=1999) として技法的に説明されてきた。オリジナル版GTA (終末期患者ケア) で得られた理論(GT)も、この図式で示すことができる (竹下, 2021)。

ここで社会や組織は、構成員の相互行為で形成されている。そこには複数の状況(A, B, …)があり、各状況は成立条件・相互方略・帰結の論理式 (if, then…) で構成されている。「この条件が揃うと、行為者AとBは互いにこの方略(strategy)を選択し、相互行為の結果、場レベルの帰結はこのようになる」という論理式である。

組合せは乗数なので、理論的複雑さを避けるために関係は「1対1」に単純化されている (Glaser & Strauss, 1964=2023; 1965=1988)。オリジナル版の終末期病棟における相互行為過程であれば、「終末期患者」に対して、「医療スタッフ (医師・看護師・介護士など)」となる。では、図1の図式は、いったい

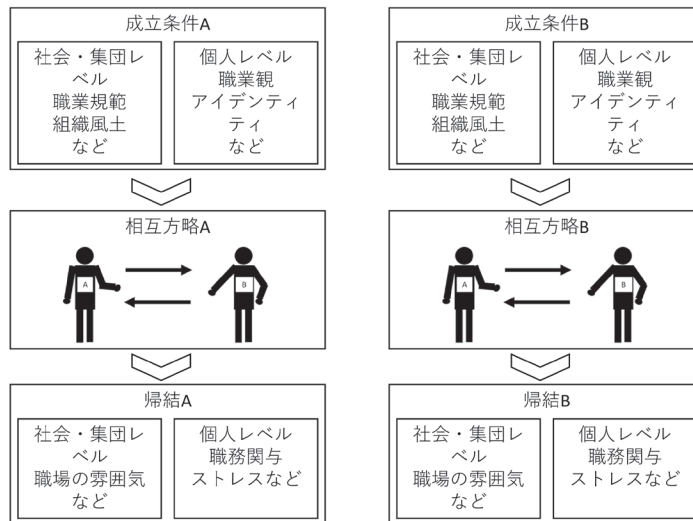


図1 SI-PT パラダイム

どのように理論的に導出されたのだろうか。

2.2.1 科学的論理学

図1は、以下説明する「過程の理論」の論理式なのである。ストラウスらの「社会心理学(第5版)」によれば、この過程の理論は、デューイが構築した「科学的論理学」(科学的方法における相互行為様式決定の不可欠な役割には、因果関係の過程が含まれる)に依拠している。

科学的論理学では、原因を「変数」ではなく「出来事の過程」として考える。相互に関連する複雑な一連の社会的現象において、第1段階(原因)が第2段階(効果)を導く(if, then...)。社会的行為の現象は構造(変数間の因果関係)ではなく過程(出来事間の因果関係)から成り立っているので、研究者は過程の規則性を解明すべきなのである(Lindesmith, et al. 1978=1981)。

つまり、「質的データだからGTAを選ぶ」のではなく、「過程の規則性を解明したいからGTAを選ぶ」のだ。研究目的が社会・集団・個人レベルの所与状態下の2変数間の因果関係の解明(構造の理論)ではなく、状態それ自体の改善にある場合、過程の理論が必要になる。たとえば、障害のある従業員と健常者管理職間の発達の相互行為パターンを改善、好事例が組織内に、やがて組織間へと普及していくことで、最終的に社会全体の包摂力が向上するわけである。

図1で、社会と二者間関係は相互作用している。環境的要因(成立条件に含まれる)が各行為者の行為(方略)を導く信念や規範などに影響を及ぼしている一方で、双方が相互に方略を実行した場の帰結(雰囲気やストレスなど)として、環境に影響を及ぼす。ではなぜ「成立条件・相互方略・帰結」なのか、「相互方略」とは何か。

2.2.2 プラグマティズムの格率：理論であるための論理式

この論理式(「成立条件・相互方略・帰結」)は、論理的には「プラグマティズムの格率(原理)」に等しい。プラグマティズムでは、概念や真理は実際の経験や実践に結び付いていなければならない(Misak, 2013, 32=2019, 72)。パースによれば、論理学を有効(科学的)にするには、観念を明晰にしなくてはならない。

観念は、それがどんな結果(実際の関わりがある)を及ぼすかで定義すべきなのだ(例:「硬い」ではなく「ナイフで引っ搔いても傷がつかないだろう」)。これがプラグマティズムの格率だ。この格率は実験的な条件であり、テスト(行為)の結果が自他共に観察可能な点で、科学的だ。これは「ある環境Cで、もし私がAをすると、私はEを経験するだろう」と定式化できる(Hookway, 2012)。

2.3 象徴的相互行為論(SI): パースの認識論・存在論の応用

「相互方略」とは、以下説明するミードの理論(象徴が媒介する二者間の相互行為過程理論:「SI」)を「組合せ」に拡張したものだ(図2)。

ある社会的な状況において、行為者AとBは、互いに相手の行為(言葉と身振り)の意味を象徴として解釈、反応的行為を選択する(Lindsmith, et al. 1999)。我々は、他者の行為を変化させるために、自分の基準で他者の身振りの意味を解釈しているのだ(Mead, 1910=2003)。意味とは態度であり、態度において解釈(思考)と反応(行為)は不可分なので、ミードは主観主義と客観主義の二律背反を超えた第三の立場となる(小川、1997, 16)。パースも、我々の思考の産物は実在的なもので、実在論と観念論は対立しないとしている(de Waal, 2013=2017, 206-209)。プラグマティズムは第三極の認識論に立脚しているのである。そして我々は、他者への働き掛けを通じて社会の仕組みを変えていく(Mead, 1934=2021)。

では、「象徴的」とは何か、そして「相互行為」とは。

2.3.1 象徴的: パースの認識論

パースによれば、「認識」とは記号的な過程であり、記号は3種類(Icon=類似記号、Index=指標記号、Symbol=意味記号)しかない。たとえば、「感情表現アプリ」を開発したとしよう。アイコン(簡略化された顔の輪郭と鼻)とインデックス(変形可能な眉・目・口のパーツ)を組み合わせると、様々な感情(シンボル)になる。人は、特定の社会的状況と自己の欲求条件でシンボル(本稿では「象徴」とする)を受信することで、特定の行為モードを生じるわけである(伊藤, 1985, 166)。

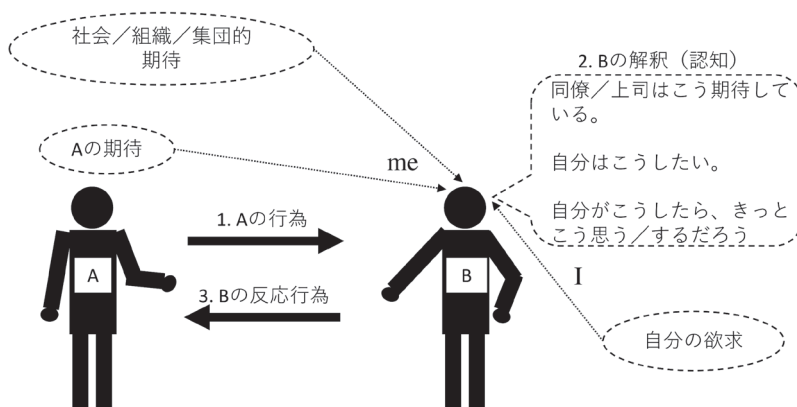


図2 SI

2.3.2 相互行為：パースの存在論

「現象」は、性質(主観的:赤い、硬いなど)、実在(客観・具体的:物質、作用と反作用がある)、法則(抽象・普遍的:経験の意味)の3種類しかない(伊藤, 1985)。ここで実在は、作用と反作用(相互作用)で定義されている。最近の量子力学(関係論的解釈)も、次のように主張する。世界を考えるのに役立つ要素は、各物理系の絶対的な属性ではなく、物理系同士の互いに対する発現のあり方である。つまり、現実是对象物ではなく、関係からなっているのだ(Rovelli, 2020=2021)。時代や学術領域を超えた共通性が感じられるのは興味深い。

こうしてミードは、パースの自然界を対象とする認識論と存在論を社会的な状況に応用して、「意味は、他者との相互行為と不可分である」とした。物理的衝突である「相互作用」は、認知と行為のセットである「相互行為」となったのである。

2.4 理論的継承と拡張の軌跡

上述した継承と拡張の流れを以下要約する。まずパースの認識論・存在論・科学的哲学は、(1)我々は世界を記号で知覚する(我々自身を含めて世界は記号でできている)、(2)物理的法則とは二物間の相互作用である(法則には他物質が不可欠である)、(3)科学的探究のために、観念を環境・行為・帰結で定義する(思考と行為は不可分で、行為部分は他者のテストが可能)、であった。

ミードは、(1)を「我々は社会を象徴で知覚する(自己を含めた社会は象徴でできている)」、(2)を「社会的法則とは二者間の相互行為である(法則には他者が不可欠)」と、社会学系社会心理学の理論に拡張した。態度は他者期待や欲求と反動的行為で定義される。物の相互作用と異なり、人の相互行為は認知と行為が一体化しているのだ。

ストラウスは、ミードの(1)を継承しつつ、(2)を「双方の異なる態度の組合せ」に拡張、(3)を「状況を、成立条件・相互方略・帰結で定義する」とパースと統合することで、過程の理論に拡張した。態度には、行為者AとBの「組合せ」が存在するのである。さらにデューイから、概念化を含む科学的論理学と、理論と応用(社会的問題の解決)が不可分であるという研究哲学(認識的活動は社会的活動の道具である)を、継承した。これがSI-PTパラダイムである。

社会は二者システムで成立している。社会的要因は組織内二者システムの相互行為パターンに影響する一方で、相互行為の帰結が社会に影響する。社会や企業の課題(例:包摂)は、二者システムの理論発見と改善のための介入で解決できる。それにより、社会学・経営学・心理学の研究者が連携して社会的アウトカムを実現することを可能にする。

状況を条件・相互方略・帰結で定義することで、現状改善のための理論を発見できる。データを概念化することで客観的分析が可能になる。主観的解釈が記述を、客観的解明が理論を産むのである。

では、実際には成立条件・相互方略・帰結はどうやって発見できるのか。分析手順の客観性や科学性は、どのように担保されるのか。

3 GTAの分析手順

3.1 基本的説明

まず、オリジナル版の分析手順全般を統御するデューイの「科学的探究」を、次に、本稿独自の工夫である分析手順の可視化を説明する。

3.1.1 科学的探求の理論

以下、魚津郁夫の解説を基に論ずる。デューイの科学的探求の定義は「象徴を用いて推論することで、不確定な状況を構成要素と諸関係(状況の確定を可能にする)に転換すること」だ。そしてこの過程には5段階ある。第1は、問題的な(不確かで混乱している)状況の存在だ。規則性の発見以前は、人は環境と様々な(不規則な)相互作用をしており、帰結もバラバラだ。第2は、社会科学の研究者が問題(分析テーマ)を特定することだ。第3は、概念の生成だ。不確定な状況はいきなり明確な構成要素に転換できないので、まずはその状況の構成要素(こうすると、こうなる)を発見するのである。第4は、様々な構成要素の意味を関連させながら、問題解決に必要な諸操作を示す理論に発展させることだ。第5は、観念のテストだ。観察された事実(問題の記述)と観念(解決策の提示)は関連(connect)している(概念は複数協力者の事実を束ねている＝グラウンデッドだ)。分析過程で解決につながる事実は結びつき、そうでない事実は除外される(魚津、1978)。

発見した過程の理論は、研究者の観念による仮説的モデルではなく、事実に基づいた法則性と解決策なのである。

3.1.2 分析過程を可視化する

GTAの分析過程を可視化したのが、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(「M-GTA」木下, 2003; 2007)の分析手順と分析ツールである。筆者はこれを改良し、概念生成票(概念が複数の具体的出来事の特徴を束ねているか)・要素構成表(上位カテゴリーが複数の下位カテゴリーを理論的に束ねているか)・過程理論図(複数の状況と、成立条件・相互方略・帰結が妥当か)で、査読者や読者の客観的判断を可能にした。これはSI-PTパラダイムを共有しているから可能なものであり、将棋のルールを知っていれば、誰でも詰将棋の過程を同様に判断できることに通じる(Takeshita, 2019)。

3.2 現状と問題

科学的探究の第1段階だ。竹下(2024)は、障害のある従業員と健常者管理職間の発達の相互行為過程の分析で、双方の消極的態度が問題であることを示しながら、以下のように説明した。管理職の態度に影響するのが暗黙の人格理論(IPT)だ。これは行動に影響を与える個人特性の可塑性に関する暗黙の信念である。従業員の性格や能力に可塑性があるかどうか、管理職は生得的/可鍛のIPTの連続体上にいる。従業員の態度に影響するのが認知された上司との関係(PMR)だ。PMRが高いと認識する従業員は内発的動機づけと仕事への関与度が高い。しかしIPTとPMRのいずれも所与状況下の変数間因果関係を説明する「構造の理論」で、状況自体(態度の組合せ)の改善については説明できない。状況の移行パターン解明には出来事間の因果関係を説明する「過程の理論」が必要である。そこで本研究は、文脈固有

の過程の理論を発見することで、以下の研究設問(略)に答えることを目的とする。

この違いを理解し易いのがK.レヴィンの指摘だ。ユダヤ人が従事する職業の統計による構造的知識(例:金融関係従事者の比率は低い)は、社会に存在する反ユダヤ的態度を変化しえない(Marrow, 1969=1972)。

3.3 分析テーマ

第2段階が分析テーマで、後述する無制約コーディングをガイドする。社会的相互行為の組合せ(例:態度や発達)に関する問題を特定する。たとえば、スキル発達支援、組織のD&I、女性管理職のキャリア開発、役職定年部下の活用などである。

分析対象は固定せずに、対象サンプリング(研究関心・問題意識に基づく対象とする場所または集団の選択)を行う(Strauss& Corbin, 1990)。分析開始時に仮決めした分析テーマは、この対象サンプリング過程で必要に応じて何度でも変更される。

普遍的な成功要因を見つけるのではなく、特有の社会的文脈における二者間関係を見つけることに注意する。たとえば、lonlやopen dialogueの成功要因ではなく、多忙な金融機関の支店におけるlonlや、当事者と支援者(含む家族)に絞り込むことで、特有の法則性を発見することができる。

3.4 面接指針

構造化質問は、職務内容やテーマ関連(例:スキルや関係の変化)の項目で構成される。非構造化質問は、理論的サンプリングやSI要素である。理論的サンプリングの例は、『同僚に助けてもらっている』とのことだが、逆に『助けている』ことはあるか?』『配慮してもらっている』とのことだが、『それで不利になる』ことはないか?』などである。SI要素の例は、ある感情に関する言明に対して『その感情をもたらした相手の行為は?』、ある行為に関して『なぜ、そうしようと思ったのか?』、『そうした結果、相手はどうだったか?』などである。SI(図2)を想起すると、思いつき易い。認知的なデータだけで終わらぬように、ある日の具体的な出来事を想起するよう促す。

3.5 逐語記録

MSワードA4縦で表を作成する。Q(分析者の質問)とA(協力者の回答)ごとに記入し、日を跨いだ作業なので、1頁1回を目安に経過時間を示しておくで後で照合し易い。コメント機能を用いて、概念に関する気づき(仮の概念名など)や技法に関する気づき(すべきだった質問など)を記入する。時間はかかるが、自分で作成することで多くの気づきが得られ、結果的に分析スキルが上達する。

3.6 概念の生成

3.6.1 概念生成票

MSワードA4縦で表を作成する。分析テーマ、概念生成票番号、人数、起票日と最終修正日を記入する。概念名・定義・具体例の他、4例(対極・類似・原因・結果)、分析メモの欄を設ける。対極・類似欄は

後述する要素レベルで、原因・結果欄は論理式レベルで、発想を促進する。最初から4例をすべて記入する必要は無く、思いついた概念の例があれば記入すればよい。対話内容を逐語記録から具体例欄にコピーし、気づきを分析メモ欄に記入する。メモした日付も記入しておく(書式例は竹下、2020)。

3.6.2 無制約コーディング

概念の発見とは、複数の具体的な出来事を、それらを理論的に束ねる抽象的特性に変換することだ。この段階では、研究設問(複数の状況、成立条件・相互方略・帰結)は意識しない。逐語記録を読み、分析テーマに照らして何か意味がありそうだと感じた言及を見つけたら、コピーして、概念生成票の例の欄に貼り付ける。特徴的な部分に下線を引く。個々の語りを転記する際、簡単なラベルをつける。類似・対極・原因・結果欄に、ありそうな概念の例を考え、思いついたら日付とともに記入する。ある概念候補に関する気づきは、メモ欄に日付と共に記入する。複数の参加者によって語られた言及の断片を結合できる現象の抽象的な特徴を探求する。暫定的な概念が有望に見えても、他の参加者の言及(概念を裏付ける)が見つからない場合は棄却する。

3.6.3 概念化で客観的分析が可能に

デューイによれば、彼は40年以上かけて、工学が数学を応用するように社会科学で応用できる論理学の理論を構築した。この科学的論理学は、法則性の観点から相互行為を再構成することで、客観的分析を可能にする。概念化すれば、協力者が経験した実際の出来事の順序とは無関係に、論理的に操作できるのである。「科学は大きな質的出来事を[...]、相互行為のセットに分解する。組合せのそれぞれは[...]連続・共存・継続的な全体を形成するために、乖離や妨害無く他と結びつくことが可能である」(Dewey, 1938: 7, 696=2013: 3, 435)。論理学は社会的科学である。文化と言語を共有する共同体で他者と相互行為している人間の行動は、分子ではなく諸象徴の抽象的セットに分解できる(Dewey, 1938:36-38=2013:29-30)。

3.6.4 指標から概念を生成するモデル

複数の経験的指標(経験への言及)の意味を比較することで(それらを束ねる特性を発見)、概念にコード化する概念化の手法である。グレイザーの例では、「明白な損失(例:患者の地位)」と「学んだ損失(例:家族や地域との関係的価値)」に関する語りを、抽象度が一段高い「社会的損失」で束ねた(Glaser, 1978)。オリジナル版の理論図(竹下, 2021)で見ると、「患者の気づきの封じ込め」段階の相互方略(論理式)要素「自己統制」を構成する4概念の1つであることが判る。

グレイザーは、このモデルは彼の指導教官であったP・Fラザースフェルドに依拠したとしている(Glaser, 1978, 62)が、ラザースフェルドは潜在構造分析(態度を測定する定量的手法で、反応の一貫性に注目する。回答者の属するクラスが「はい」/「いいえ」を決定する)の発明者なので、やはりデューイに依拠したとすべきだ。ラザースフェルドを応用したことのメリットは、複数の指標を束ねることを概念の成立条件としたことである。デューイは1例でも概念化可能としたが、少なくとも2例目を束ねないと特性の妥当性が判断できないからだ(Glaser and Strauss, 1967: 30=1996: 41)。

3.6.5 演習: 概念で束ねてみよう!

(問題) 視覚に障害がある事務職の従業員が、他者と相互行為しながらスキルや担当業務を開発してい

くプロセスに固有の現象は何か。以下2つの語を見て、SIの観点から着目した箇所に下線を引き、それを共通の概念(抽象的特質)で束ねよ(「6-1」は6社目の1人目を示す)。

ただ、「出来ません」って言う時には、「何処までが出来ません」「だけど、どうしたら出来ます」とか「何処までなら出来ます」っていうことは、必ず申し添えるようにはしています。6-1 (全盲) : p.11

0.5mmのボールペンで社員番号書かれた時に見えないんで。皆さんに、「できればマジック、サインペンで書いて貼ってもらった方が見やすいんでお願いします」とか協力は求めてたりします。11-2(弱視) : p.12-13

(回答)浮上した概念は、「不可能の開示と代替策の提示」だ。所属企業や職種、障害の度合いを越えて、「こういう状況下では、相手にこういう働きかけをする」という、具体的で日常レベルの方略の法則性(開示と提示のセット)である。こうして概念化すれば、3つ目の語りを束ねることも可能になる。3例目を以下に示す。

たとえば、でっかい「8」って文字を描いて「僕はここ(左下側)が欠けて見えるんです」って。6の繋がってる部分が欠けてて5に見えるとか。「なので請求書の金額扱うのは怖いです」。正直、現状を伝えます。で、それでさらに、自分なりに解決策を調べておいて伝えます。(略)「今、これ出来ないですけど、こういう手助けがあったら、こうできると思います。ちょっとここを助けて貰えませんか」って。建設的に自分のアラを出せる。11-4 (弱視) : p.11-12

4例目以降の語りが出た場合は、概念の分割を検討する必要性が生じる。理論的特性が異なる概念を混在して束ねている可能性があるからだ。「1概念当たりの言及者数が多い(例: 15人中13人)ので、妥当性がある」と主張する論文があるが、概念化ではなく分類を行っている可能性がある。率を気にするのは定量的思考法(構造の理論)だ。

すべての概念生成票が高いレベルで抽象化していなくても構わない。たとえば、「秘書検定への挑戦」「簿記の資格」を「資格の取得」で束ねることもあるだろう。抽象化の度合いが低くても他概念と結合すれば高まるし、理論的関連が無い概念は結合相手が見つからず棄却されるからだ。無制約コーディングでは、何も気にしないで沢山生成してよい。重要なことは、概念は、SI概念だから、SI成分(理論的な説明力)を含んでいるということだ。束ねて抽象度を高めると、説明力は因果関係を示唆しうるほどに高まるのである。

3.6.6 パース：アブダクション

演繹法は、「白豆の袋がある(A)」「この袋から幾粒か取り出す(B)」。よって「これらの豆は白い(C)」と結論する。帰納法は、BとCという行為と結果が多数得られたので「あの袋は白豆袋である(A)」と結論する。パースは、第三の推論であるアブダクションを提起した。これは、「ここに豆が数粒落ちている」(C)と「あ

そこに白豆袋がある」(A)から「この豆はあの袋からこぼれた」(B)と結論する(魚津、2006)。「こう考えると、辻褄(論理的整合性)が合う」という推論である。

パースは、アブダクション(記号を操作して可謬性を伴う推論)を重ねることで実在に迫るのが科学であるとした(有馬、2001, 12)。これはGTAに不可欠の分析スキルなのである。たとえば、様々な終末期病棟を観察したとしよう。看護師と患者のストレスが蓄積している病棟もあれば、雰囲気の良い病棟もある。そこから、「死の事実を隠すからストレスが生じ、開示すれば上手く行くのではないか(条件)」[「ということは、お互い演技やカマかけがあるな(方略)」]と思いつくためには、論理式レベルのカテゴリーが必要ことが判る。一方、前節で成立した概念は複数個人の具体的体験の抽象化であり、データで直接立証されているものの、理論的抽象度は低い。ではどうすれば、理論の発見に近づけるのか。

3.7 過程理論図と要素構成表

3.7.1 理論化コーディング

要素カテゴリー発見と論理式カテゴリー発見の2段階で行う。要素カテゴリーの発見段階では、同じ特性を持つ複数の概念を、理論的に一段高いレベルで組み合わせる。社会科学の構成概念は複雑なので、側面(dimension)に分割する必要がある(Lazarsfeld, 1958)。過程の理論を構成する論理式カテゴリーを、いきなり複数の語りのデータから直接発見することは出来ない。概念はそのレベルの理論的説明力を有していないからだ。そこで概念を入れ子構造にしていく(抽象的特性で更に上から束ねる)ことで、複数の側面を備えることができ、要素カテゴリーの説明力は概念に比べて強くなる。論理式カテゴリーを側面(要素カテゴリー)に分解するのではなく、先に側面の候補を、概念を束ねることで発見しておくのである。

論理式カテゴリー(成立条件・相互方略・帰結)の発見段階では、要素カテゴリーが束ねられ、論理的な説明力が強まっていくことで、論理的因果関係に結合可能になる。「出来事の非時間的な諸関係で構成されている一般化を道具的・操作的に利用することで、質的には似つかない複数の出来事が単一の連続的出来事の構成要素になる」(Dewey, 1938: 715=2013: 446)。「相互作用の順序が抽象化されるので、『もし…ならば』(普遍的命題)」という象徴で、理解可能になる」(Dewey, 1938: 685=2013: 430)のである。

初期段階の過程理論図と要素構成表を用いて、SI-PTパラダイム(図1)をイメージしながら、条件・相互行為方略・現場での帰結で構成される複数の状況が出現するように、カテゴリーと構成要素の様々な組合せを試し続ける(絶え間ない比較分析)。

理論図上に概念名を並べて、いろいろな位置や名前を試してみる。「このサブ・カテゴリーは、どの条件の、どの理論的要素になるのか?」。概念図の位置や組合せを継続反復的に見直し、必要に応じて概念名やカテゴリー名を修正、1つの修正は概念生成票・要素構成表・過程理論図のすべてに同時に反映させる。修正は抹消せず取り消し線で残し、修正日を記入する。カテゴリーの捏造はできない。下からデータが引っ張るからだ。まずは、複数の状況を論理的に探す。「双方の方略の論理的なセットは?」「その結果、場はどうなる?」「なぜその方略を選んでいるのか?」。

たとえば、質的に異なる複数の帰結が浮上してくれば、それをもたらす相互方略を考える。発達の相

れている)ので、分析者が勝手に論理的に飛躍させることはできない。収集したデータの特徴により、浮上した過程の理論図が理論的に完全な形に収束しないことは十分あり得る。その場合、不十分な部分を明記して、判断の経緯を説明すればよい。では、両側分析では、どう判断するのか。

3.7.4 突合によるコア・カテゴリー発見

竹下(2024)の視覚障害のある従業員と晴眼者管理職間の発達の相互行為過程分析では、従業員が認識する段階は「特例子会社の選択」「作業への慣れ」「社員基準の受容」、管理職が認識する段階は、「福祉的」「職人的」「戦力的」の3つだった。両側図を突合して抽象度を上げると、いずれの3段階も、「未達」「維持」で良しとするか「向上」を追求するかという職場の「暗黙の満足基準」で束ねられることが判明した。各段階での方略(行為)は概ね対応していたので、3つ以外の組合せは理論的に妥当性が低いと考えた。

3.8 段階的テストの導入

3.2節で説明したデューイの科学的探究の第5、観念のテストは、他者によるテストではない。一方、1.1節で紹介した質的研究者の驕りには、「社会的実在の把握に失敗したことを、分析者はどう知なのか?」も含まれている。

本稿は、分析手順を可視化したことで、段階的な他者による妥当性テストを可能にした。概念生成段階では、異なる二人の出来事の束ね方が理論的に妥当か、概念生成票を見ることで他者のテストが可能だ。カテゴリー発見段階は、要素構成表でテストできる。

更に堅固な方法が、行為によるテストである。行為者Aの片側分析と相手側分析の妥当性は、分析結果(過程の理論図)を突合して、双方の方略カテゴリーが一致するかどうかでテストできる。行為は双方が観察可能なので、各段階における双方の方略が一致していれば、分析結果の妥当性は高いわけである。

最初の片側分析で得られたのと同じ要素カテゴリーを、相手側の片側分析で揃えることはできない。データから抽出した概念が下(抽象度の低い層)から足を引っ張るからだ。もし無理をしても、要素構成表で理論の飛躍が露見してしまう。再分析あるいはデータの追加収集が必要だ。

そして、双方の信念と行為のメカニズムに共通する特性(コア・カテゴリー)が浮上するかで更にテストされる。

4 理論の応用

GTAの目的は理論の日常生活への応用だ。理論と実践は不可分なのである。(Glaser & Strauss, 1967, 237=323)。それはなぜか。

4.1 パース：探求の論理(科学)

魚津郁夫によれば、パースは、学問や研究は「探求」(疑念から信念へと到達する努力)であるとした。信念の確定とは、行為の原則となる認識に疑問が生じた状態から、行為に確実な指針を確定することだ。それには科学の方法が最も有効である。科学の方法とは、信念を、固執・権威・先天的方法ではなく、

外部の実在で決定することだ。探求するすべての人が究極において同意する意見が真理である。こうした意見で表現されている対象が実在だ。真理は極限概念であり、全員同意は無限の先だ。一旦真理として受容されても、後に誤謬とされる可能性もある（可謬主義）。真理は、探求者たちの同意で確立される点で、社会的なのである（魚津、2006）。プラグマティズムとは、データに基づく象徴を操作して社会的問題を解決できる法則を示し、現場に応用することで真理に近づくことなのだ。

GTA創始者も、理論は永遠に展開していく総体であり、完結した成果ではないとしている（暫定的成果として公表することは可能）（Glaser Barney and Strauss, 1967, 32=1996, 43）。『日本語版への序』によると、オリジナル版が刊行された頃は数名程度だった医療・保健従事者の勉強会が、数年後には数百名から1,000人近いレベルにまで急増した（木下訳、1988, v）ので、終末期医療現場のベターメントにつながったことが判る。しかし、我々の分析結果がすべてこのレベルの注目を集めるとは考えにくい。では、どうすればよいか。

4.2 レヴィン：アクションリサーチ(AR)

社会科学の研究者は、GTAで発見した理論をARで応用することで、この問題を解決できる。

ARの創始者であるK.レヴィンは、パースに依拠した科学的プラグマティストで（Adelman, 1993）、堅固な理論・実験的方法論・社会的問題解決を統合した（Schein, 1989）。科学研究（リサーチ）の要件は、人々の認識と行動が変化するように関与（アクション）することだ（ハツ塚、2013）。経験的理論と実験とを結合した科学的な社会学と社会心理学は、自然科学と同等あるいはそれ以上に、人間生活の改良に資することができる（Lewin, 1939=2017, 84）のである。

プラグマティズムの格率は、レヴィンの業績がルーツの組織開発研究（Coghlan, 2015）でも応用されている。行為者が状況を制御し、他者が行為者の行為を説明・予測するのに役立つ「行為の理論」は、「ある状況(S)において、帰結(C)を達成したいなら、諸仮定(a,...n)下で、行為(A)をすること」と定義される（Argyris & Schön, 1978）。ただしこの行為の理論は、組織や集団の全成員に共通である点で、図1とは異なる。違いの原因は、ストラウスによるミードの代入である。

M-GTAの創始者木下康仁の指導教授キーファーは、保健人類学領域でプラグマティズムに基づくARを提案した。有用性が無ければ理論ではない。研究者の役割は地域の生活を観察・分析することではなく彼らの目標達成を支援することだ（Kiefer, 2007）。

木下は、対人援助職が自分のケア現場の見立てにGTAの分析概念を応用することを可能にする修正版GTAを開発（『M-GTA』木下、1999）、理論と応用を一体化した。ここで分析者は応用者である。見立てを自分の患者や利用者に応用してその結果を基に修正したり、同僚や他の専門職と図解で共有したりできる。M-GTAの研究哲学によれば、GTAの理論要件は現場で応用されることだ（木下、2014）。この「応用されてはじめて理論と言える」というARの実践性は、代表的な質的心理学テキストでも評価されている（Willig, 2021）。

社会科学の場合、自分が発見した過程の理論に基づいて支援プログラムを開発し、それを新たな参加者に実施する場合、その理論が客観的・科学的な手続きで得られた事実を示すことが、研究者としての

責任となる。たとえばTakeshita (2022) は、発見した過程の理論を基に開発した支援プログラムを新たな従業員と管理職ペア2組に実施、理論と参加者の経験・認識の一致度および状況改善効果を検証している。

5 考察

5.1 手法論的貢献

本稿の手法論的貢献の第1は、GTAの「やり方」から意味論的に訴求して、「考え方」の本質に関連する文献を抽出したことだ。プラグマティズムは、他者観察によるテストが必要である点で、現在普及しているGTA（当事者にとっての意味を解釈する）とは異なる。状況自体を改善するために、所与状況下の変数間関係の統計的検定でなく、出来事間の因果関係を説明する「過程の理論」を発見・応用する。実証主義でも社会的構成主義でもない、信念と行為（認知と行動）を不可分とする認識論である。

第2に、M-GTAのツールを用いて、オリジナル版GTAの分析手順に、科学的な分析に必要な「他者によるテスト」を導入した。これにより、質的データであっても、客観的で科学的な分析を追求することが可能であることを示した。この2点により、社会科学の研究者は、自己の領域で求められる基準を判断し、それに基づいて分析することが可能になるだろう。

第3に、ストラウスのSI-PTパラダイムをARで拡張した。それにより、GTAに基づくアクションリサーチで、理論発見と状況改善を一体化できることを示した。研究は論文を書いて終わりではない。社会的問題に支援的介入を行うことで、社会科学における研究のアウトカムが実現できる。

デュースに直接師事した日本初のプラグマティスト（荒木、2021）田中王堂によれば、海外の先進的な哲学や科学理論を導入する際の日本人固有の「疾患」は、本質部分と文脈部分を弁別せずに模倣することだ（田中、1925）。これは現在も同様で、たとえば木村らによれば、日本では社会的背景や政策的含意を参照せずに米国型のマイノリティ概念を無批判に導入した結果、イメージが拡散、意味が希薄化している（木村・ユ、2024）。

オリジナル版の誕生時、プラグマティズムと手順は一体化していた。その後両者は乖離し、思想は理論的に（データや問題解決を離れて）、行為は実践的に（科学やテストを離れて）論じられてきた。本稿の議論は抽象度が高いので、複数の研究領域を束ねることができる。社会科学の研究者が自らのデータと分析結果に基づいて、学術領域を跨いで連携する契機となれば幸いである。

5.2 分析実践への含意

第1に、分析テーマの設定など分析の準備段階からSI-PTパラダイム（コード）を理解・意識していないと、理論の要素となり得るデータは収集できず、分析は拡散し理論的解に収束しない。たとえば、「成功要因」や「考え方の時期別推移」を知りたい分析者は、それしか質問しないし概念化しないので、作業の結果は解釈の図解（記述）になる。

第2に、「1対多」「片側のみ」「認知的要素だけ」「論文で終わり」はいずれも不可である。理由は本文で

説明したが、ここで改めて確認しておく。

5.3 限界と方向性

本稿の限界の1つ目は、哲学や社会学領域にある。理論や学説史の研究者から見ると、古い文献や入門書に基づく理解は不十分かつ浅薄で、その後の発展も無視している。今後、ご教示を頂くことで学びを深めたい。

2つ目は、分析手順の説明で組織開発や組織心理学領域の文献を主にせざるを得なかったことだ。他領域でも（例：産業・労働社会学独自の視点の第1は社会的相互行為：小川、2015, 10）、研究が進むことが望まれる。

3つ目は、分析対象が上司・部下間の発達の相互行為過程であることだ。スキルとタスクの開発という目標が両者で一致しており、オリジナル版のような駆け引きは存在しない。多様な相互行為過程の解明が望まれる。

A.ギデンズによれば、社会学は本来実践的な学問であり、社会改革に貢献することができる。特定の社会状況を理解すれば状況自体を統制できるので、理解を可能にする理論を提示すれば集団や個人が生活を改善できるからだ(Giddens, 2009)。

過程の理論を発見・応用することで、社会科学の研究者は、世界の傍観的洞察ではなく、自然科学を補完しうる、研究の社会的アウトカムを実現できるのである。

参考文献

- Adelman, Clem, 1993, "Kurt Lewin and the origins of action research," *Educational Action Research*, 1 (1) : 7-24.
- 荒木優太、2021、『転んでも良い主義の歩み—日本のプラグマティズム入門』フィルムアート社。
- Argyris, Chris and Schön, Donald, A., 1978, *Organizational learning: A theory of action perspective*, Reading: Addison-Wesley.
- Bacharach, Samuel B., 1989, "Organizational theories: Some criteria for evaluation," *Academy of Management Review*, 14 (4) : 496-515.
- Charmaz, Kathy, 2014, *Constructing Grounded Theory*, 2nd ed. Thousand Oaks, CA: SAGE Publications. (岡部大祐監訳、2020、『グラウンデッド・セオリーの構築 第2版』ナカニシヤ出版。)
- Coghlan, David, 2015, "Organization development: action research for organizational change," Hilary Bradbury ed., *The SAGE Handbook of action research*, Thousand Oaks, CA: SAGE Publications, 417-424.
- De Waal, Cornelis, 2013, *Peirce: A guide for the perplexed*. London: Bloomsbury Academic. (大沢秀介訳、2017、『パースの哲学について本当のことを知りたい人のために』勁草書房。)
- Dewey, John, 1938, *Logic: The theory of inquiry*, New York: Henry Holt and Company. (河村望訳、2013、『行動の論理学—探求の理論』人間の科学新社。)

- Giddens, Anthony, 2006, *Sociology, 5th ed.*, Cambridge: Polity Prtess. (松尾精文・西岡八郎・藤井達也・小幡正敏・立松隆介・内田健訳、2009、『社会学 第五版』而立書房。)
- Glaser Barney G., 1978, *Advances in the methodology of grounded theory: Theoretical sensitivity*. Mill Valley, CA: The Sociology Press.
- Glaser Barney G. and Strauss, Anselm L., 1964, "Awareness contexts and social interaction," *American Sociological Review*, 29 (5) , 669-679. (山口健一・鎌田大資・桑原司訳、2023、『シンボリック相互作用論 基本文献翻訳シリーズ No. 3 自覚文脈と社会的相互行為』『経済学論集』100: 93-114。)
- , 1965, *Awareness of Dying*. Piscataway, NJ: Aldine Transaction. (木下康仁訳、1988、『死のアウエアネス理論と看護—死の認識と終末期ケア』医学書院。)
- , 1967, *The discovery of grounded theory: Strategies for qualitative research*. New Brunswick, NJ: Aldine Transaction. (後藤隆・大出春江・水野節夫訳、1996、『データ対話型理論の発見—調査からいかに理論をうみだすか』新曜社。)
- Hammersley, Martyn, 1989, *The dilemma of qualitative method: Herbert Blumer and the Chicago tradition*. London: Routledge. (谷川嘉浩訳、2022、『質的社会調査のジレンマ—ハーバート・ブルーマーとシカゴ社会学の伝統』勁草書房。)
- Holton, Judith, A., 2018, "From grounded theory to grounded theorizing in qualitative research," Catherine Cassell, Ann L. Cunliffe and Gina Grandy eds. *The SAGE Handbook of Qualitative Business and Management Research Methods: History and Traditions*, Thousand Oaks, CA: SAGE Publications, 233-250.
- Hookway, Christopheher, 2012, *The pragmatic maxim: Essays on Peirce and pragmatism*. Oxford: Oxford University Press. (村中達矢・加藤隆文・佐々木崇・石田正人訳、2018、『プラグマティズムの格率—パースとプラグマティズム』春秋社。)
- 伊藤邦武、1985、『パースのプラグマティズム』、勁草書房。
- Kiefer, Christie, W., 2007, *Doing health anthropology: Research methods for community assessment and change*, New York, NY: Springer. (木下康仁訳、2010、『文化と看護のアクションリサーチ—保険医療への人類学的アプローチ』医学書院。)
- 木村護郎クリストフ・ユ・ヒョジョン、2024、『岩間暁子教授のマイノリティ研究』『応用社会学研究』、66: 1-2.
- 木下康仁、2003、『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践』弘文堂。
- 、2007、『ライブ講義M-GTA—実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』弘文堂。
- 、2014、『グラウンデッド・セオリー論』弘文堂。
- Langdridge, Darren, 2007, *Phenomenological psychology: Theory, research, and method*, Harlow, UK: Pearson Education. (田中彰吾・渡辺恒夫・植田嘉好子訳、2016、『現象学的心理学への招待—理論から具体的技法まで』新曜社。)
- Lazarsfeld, Paul, F., 1958, Evidence and inference in social research, *Daedalus*, 87 (4) , 99-130.

- Lindesmith, Alfred R., Strauss, Anselm L., and Denzin, Norman. K., 1978, *Social psychology, 5th ed.*, New York: Holt, Rinehart and Winston. (船津衛訳、1981、『社会心理学—シンボリック相互作用論の展開』恒星社厚生閣。)
- , 1999, *Social psychology, 8th ed.*, Thousand Oaks, CA: SAGE Publications.
- Marrow, Alfred, J., 1969, *The Practical Theorist: The Life and Work of Kurt Lewin*. Colchester: BDR Learning Products, Inc. (望月衛・宇津木保訳、1972、『クルト・レヴィン』誠信書房。)
- Mead, George H., 1910, “Social consciousness and the consciousness of meaning,” *Psychological Bulletin*, 7: 397-405. (加藤一己・宝月誠編訳、2003、『第2章 社会的意識と意味の意識』『G.H.ミード プラグマティズムの展開』ミネルヴァ書房。)
- , 1934, *Mind, self, and society: from the standpoint of a social behaviorist*. Chicago: University of Chicago Press. (山本雄二訳、2021、『G・H・ミード 精神・自我・社会』みすず書房。)
- Misak, Cheryl, 2013, *The American pragmatists*. Oxford: Oxford University Press. (加藤隆文訳、2019、『現代プラグマティズム叢書 第1巻 プラグマティズムの歩き方—21世紀のためのアメリカ哲学案内』勁草書房。)
- 大嶋玲未・竹下浩、2025、「精神障害者保健福祉手帳所持者を雇用する特例子会社における管理職と部下の社会的相互作用過程」(印刷中)『心理学研究』、96 (2)。
- 小川英司、1997、『新版 G・H・ミードの社会学』星雲社。
- 小川慎一、2015、「「働くこと」を社会学する—産業・労働社会学の視点」小川慎一・山田信行・金野美奈子・山下充「「働くこと」を社会学する—産業・労働社会学」有斐閣、1-18。
- Rovelli, Carlo, 2020, *Helgoland. The Strange and Beautiful Story of Quantum Physics*. Dublin: Penguin Books. (富永星訳、2021、『世界は「関係」でできている—美しくも過激な量子論』NHK出版。)
- Schein, Edgar, H., 1989, *Organization development: Science, technology or philosophy? MIT Sloan School of Management Working Paper*, 3065-89-BPS.
- Strauss, Anselm. L., 1987, *Qualitative analysis for social scientists*, New York, NY: Cambridge University Press.
- Strauss, Anselm. L. and Corbin, Juliet, 1990, *Basics of qualitative research: Grounded theory procedures and techniques*, Thousand Oaks, CA: SAGE Publications. (操華子・森岡崇・志自岐康子・竹崎久美子訳、1999、『質的研究の基礎—グラウンデッド・セオリー開発の技法と手順』医学書院。)
- , 1998, *Basics of qualitative research: Techniques and procedures for developing grounded theory*, 2nd ed., Thousand Oaks, CA: SAGE Publications. (操華子・森岡崇訳、2004、『質的研究の基礎—グラウンデッド・セオリー開発の技法と手順 第2版』医学書院。)
- Takeshita, H., 2019, “Thoughts on and methods used in M-GTA,” Nobutaka Ishiyama, Yoshinobu Nakanishi, Kenta Koyama, and Hiroshi Takeshita eds., *Mechanisms of cross-boundary learning: Communities of practice and job crafting*, Newcastle upon Tyne, UK: Cambridge Scholars Publishing, 59-92.
- 竹下浩、2020、『精神・発達・視覚障害者の就労スキルをどう開発するか—就労移行支援施設(精神・発達)および職場(視覚)での支援を探る』遠見書房。

——、2021、「経営・心理学におけるGTA評価基準の検討」『経営行動科学』33（1-2）：1-24。

Takeshita, H., 2022, “Improving dyad relationships by integrating grounded theory and action research: Developing potential jobs for those with visually impairments,” *The Irish Psychologist*, 4 (5=Supp.) : S32-S32.

——、2024、「特例子会社における視覚障害者の能力・職務開発一過程の理論の発見」日本応用教育心理学会 第39回研究大会発表論文。

田中王堂、1925、『解釋の哲學』聚芳閣出版。

魚津郁夫、1978、『世界の思想家20 デューイ』平凡社。

——、2006、『プラグマティズムの思想』筑摩書房。

Willig, Carla, 2021, *Introducing qualitative research in psychology, 4th ed.*, London: Open University Press.